

異業種における障害者雇用 「やましめじ」栽培事業

本誌編集長 佐藤俊彦

各都道府県には、障害者の雇用と職場定着のために、事業主に対して各種助言、援助を行っている障害者雇用促進協会がある。今回「地方協会レポート」と称して訪ねたのは、山形県。山形県障害者雇用促進協会事務局次長の川田栄さんにご案内いただいた。障害者関係の助成金を活用しながら、職場定着から継続雇用までに至った経緯を、是非レポートしてもらいたいということだった。

**「為せば成る為さねば成らぬ…」
いま見直される上杉鷹山**

例年にも増して「豪雪」に見舞われている山形県置賜地方。その置賜地方の中心都市である「JR米沢駅」に降りたつと、漂ってくる冷気が全く違う。今年の寒さが一段と厳しいことをうかがわせてくれる。道路両脇には「除雪作業」で出上がった「雪の壁」がうずたかく積み上がり、道路をふさぐ形になっている。うっかり革靴を履いてきたものの、歩き方が危ういことこのうえない。

タクシートの運転手さんに聞くと、「この一月までに一年分の雪が降りました。これから一番雪が降る二月ですから、どうなることやら。こんなことは雪の多い米沢でも珍しいことですよ」と言う。

さて、山形県米沢市。人口は約九万人。山形県の南部、置賜盆地に位置し、宮城

県・福島県と境を接している「山形県の玄関口」である。

「米沢は、いまABCと呼んでPRに努めているんですよ」と川田さんが教えてくれた。ABCとは、Apple（りんご）、Bee f（米沢牛）、Car p（鯉の甘煮）。残念ながら、名物「米沢ラーメン」は入っていないらしい。

米沢市の基幹産業は、かつては「米沢織物」だった。米沢織の歴史は古く、米沢藩第一代藩主、上杉景勝公の時代にさかのぼる。これをさらに本格的に産業として奨励したのが米沢藩第九代藩主、上杉鷹山公だ。上杉鷹山公は藩財政の立て直し、殖産を図るため桑を植え養蚕を奨励し、それが米沢織の原形といわれている。以来、米沢は絹織物の産地として全国に名声をはせることとなり、米沢市の基幹産業となっていた。

「質素儉約の神様」、「江戸時代屈指の名君」と語り継がれている米沢藩主、上杉鷹山公だが、彼が残した「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」は、財政改革が叫ばれている今日、再認識されている。

最近では、人口九万人強の小都市にもかかわらず、八幡原中核工業団地をはじめとする企業誘致が進み、電機・機械産業の出荷額では東北一という工業都市に様変わりしている。

**「ハローワーク米沢」
雇用率未達成企業五三・九%
根気よく事業所訪問を続ける**

障害者を雇用している事業所取材の前に、サポーター体制や管内の情勢を含めて、当地の実情等を「ハローワーク米沢」にて聞いてみることにした。ハローワーク米沢管内の雇用失業情勢は、平成一三年度の有効求人倍率〇・四〇倍をボトムに改善傾向にあり、平成一六年度には〇・九一倍まで改善されている。

しかしながら、障害者の雇用状況をみると、雇用率は厳しい状況だ。平成一六年度の一・九二倍をピークに、平成一六年度には一・三六倍まで低下した。また、未達成企業の割合も平成一三年度三四・一%から平成一六年度には五三・九%まで増加してしまっている。

この状況を山田忠彦所長は、「全く痛恨の極みです。計画的に事業所を訪問してはいるんですが……。私の行政経験のなかで、このハローワーク米沢・長井管内が一番長いんです。何処の事業所へ行っても顔なじみですから、余計に現在の状況が歯がゆい」と言う。

各事業所を訪問してよく言われるのは、「障害者を雇用する仕事はどこにあるのか教えて下さい」ということだという。さすがに、この言葉にはびつくり



ハローワーク米沢を訪ね
山田忠彦所長らから話を聞く



したようだ。障害者の目線に立って、仕事、作業を分析すれば、障害者雇用への糸口がおのずと見つかるはずなのだが、最近はそのような視点、分析が欠けているのではないかとこのことを痛切に感じているとのこと。

「やはり、この米沢という土地柄が持つ保守性からくるのか、新しい職域を開拓して障害者を雇用してみようという発想が若干欠けているのかもしれない」と山田所長は続ける。

固定観念にとらわれすぎて、なかなか障害者を雇用する仕事を見いだすことができないという事業主からの相談が多い。「所長が（仕事を）見つけてくれたら雇用してもいいよ。でも、我が社には、なかなか仕事がないと思うよ」とまで言われてしまう。

「この言葉を、実は待っていたりするんです。現場を見せてくれるっていうことですし、ずっと見ていれば何か仕事があるものですよ」と意外にも笑って話す山田所長。

事業主の意識が低いときには、山形障害者センターのカウンセラーと一緒に事業所へ赴いて、その仕事内容をじっくりと一日中観察する。冷静に、そして客観的に分析すると、気付かないところに障害者の職域を発見することができるという。

根気よく事業主への指導、助言等を繰り返し行っていくことで、当初は「障害



株式会社後藤組 本社



青野隆一取締役

株式会社後藤組

〒992-0052 山形県米沢市丸の内2-2-27
TEL 0238-23-4511 FAX 0238-23-4535



佐藤長衛バイオファーム所長



バイオファーム

〒992-1125 山形県米沢市万世片子4364-9
TEL 0238-28-5020 FAX 0238-28-2534

株式会社「後藤組」は平成一一年、障害者雇用優良事業所表彰の「労働大臣表彰」を受賞している事業所だ。大正一五年「土木、建築請負業」として創業。以来八〇年「二一世紀は、心の豊かさが求められる時代。安らぐ空間の創造と潤いある地域文化の発展に貢献すべく人を呼び、育て、未来を創造する」ことを社是としている。代表取締役社長である後藤茂之氏はさらに、「技術力と知識、そして新しいことへ挑む勇氣と努力を結集して邁進したい」と述べておられる。

最初に話をうかがったのは取締役建設事業本部部长の青野隆一さん。建設業でありながら、全くの異業種「やましめ

【後藤組】 堅調に伸び続ける バイオファーム事業

者の仕事がどこにあるんですか？」と意識が低かった事業主も考え方が次第に変わってくるという。まさに、上杉鷹山公の言葉どおりだ。

「どうにか事業主の方々にも気付いて欲しいし、障害者雇用への理解もぜひとも深めてもらいたい」という強い気持ちのもと、障害者担当の池田忠義統括職業指導官、武田美紀子職業指導官とともに、時間のある限り事業所訪問を繰り返している。

じの大量栽培」事業に参入した経緯を聞いてみた。

「バイオファーム事業部を創設したのは昭和六〇年です。先代の社長が公共事業の減少に危機感を抱いて始めたのがきっかけです。その当時、岩手県にある小



(上) 収穫直前のやましめじ (約105日目)
(下) バイオファームで育成、出荷されるやましめじ

害者を雇用している。バイオファーム製造ラインに五人、販売ラインに一人、リースセンター資材に一人。彼らは、主に「万世通動寮」で暮らし、バイオファームへ出社している。通動寮とは、就労している知的障害者を職場に通動させなが

野正建設さんはじめ、異業種への参入が頻繁に東北の業界のなかで話題となり、我が社でもいろいろと検討した結果、導入に踏み切ったんです」

バイオファーム事業は、創業時から障害者雇用に取り組み、現在七人の知的障

ら一定期間入所させて、対人関係の調整、余暇の活用を健康管理等独立目的とする施設のこと。福祉法人山形県手をつなぐ親の会が運営している。

バイオファーム事業部は、後藤組の土木部、建築部が所属する建設事業本部の

なかの「万世統合事務所」として位置づけられている。この事務所を統括しているのは「バイオファーム所長」佐藤長衛さん。長く経理・総務畑で実務を経験してこられた佐藤所長は開口一番、こう言われた。

「この事業に携わった当初は、全くビックリしました。建築や土木と、まるで単価が違うものだから、感覚に慣れるまでが大変でした」

佐藤さんはそれまで、「鉄筋の単価〇万円」や「受注契約額が何億円」という世界で働いていた。それが「一〇〇グラム何円」の商売の世界への異動は、慣れるまでは苦労も多かったようだ。効率的な運営を検討してみたり、きのこの品種を変更してみたりと模索しても、結果は建設業とは比較にならない。

しかし、会社全体の売上のなかで「バイオファーム事業」は常に堅調な売上実績を示し続け、いかにも「縁の下の力持ち」的な働きを示している。いまでは後藤組のシンボリックな事業として位置づけることができる重要な事業になっている。

さて、実際にバイオファーム事業にて栽培している「やましめじ」が出荷されるまでの工程を見学させていただいた。「培養」→「育成（発生）」→「収穫」の過程を経て、市場へ出荷されるまでには、約一〇八日間を要する。

具体的には、針葉樹おがくずを栽培ピ



培養室で作業する佐藤守さん



菌床となるおがくずなどをビンに詰める自動充填機のラインに乗せる堀江美津代さん

ンにビン詰めし、殺菌した後、菌を接種し培養へ。培養室で約七〇日間育てられる。その後培養された栽培ビンは育成室へ運び出され、出荷までの三〇日間じっくりと育成される。収穫期となるのは、菌を接種してから一〇五日目。あとは、販売ラインへ移動、梱包・箱詰めして市場出荷ということになる。

「障害者雇用継続助成金」の活用で継続雇用が可能になった

実際に作業に従事しているところを拝見させていただいた。

菌床となる「おがくず」などが詰まったビンを自動充填機のラインに乗せる作業を行うのは、堀江美津代さん。三段重ねになったパレットを慎重に、かつ手早く扱っている。

培養室から出てきた「やましめじ」のパレットを育成（発生）室へ運び出す作業に従事する岡田俊幸さん。勤続一九年になるベテランだ。

岡田さんは知的障害に加え、二年前の作業中の負傷による左腕、肘などの機能障害のため、九〇度以上腕を上げることができない。このため、精神的にも肉体的にもダメージを負って、以前の材料混合作業への復帰が困難になってしまった。そこで、配置転換を行って、発生室へのパレット運び出し作業に従事すること



になった。しかし機能障害のため、パレットをコンベアに乗せる台座の高さが合わずに負担になってしまふのだ。左腕に力が入らないため、補助者を配置しながら作業を行っていたが、負担軽減のできる機械を導入すれば、岡田さん一人でパレットを持ち上げて、コンテナに押し込むことができる。

佐藤所長は、山形県障害者雇用促進協会の川田さんに相談をもちかけた。相談は「障害者雇用継続助成金」を活用した「新たな機器」を導入することを検討すること。創業当初から雇用している岡田さんを何とか継続雇用したいとの思いか

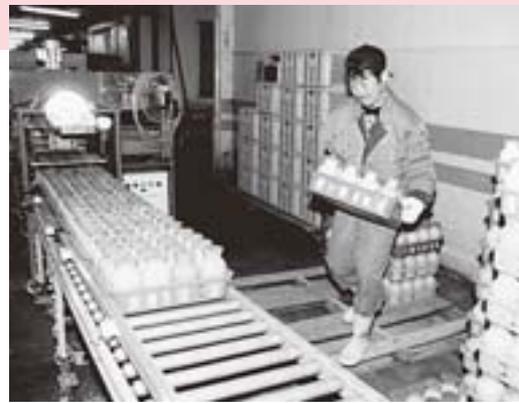


(上) 障害者雇用の優良事業所として大臣表彰（平成11年度）を受けた。表彰式の写真と記念品の花びんが、バイオファームの玄関に飾られている
(下) バイオファームの長谷部正樹さんから説明を受ける筆者

らだった。

コンテナ台座の斜度が調整でき、コンテナへの押し込みがスムーズにできるようになり、ラインコンテナを制作する業者へカスタマイズを依頼。岡田さんの作業負担が軽減するような工夫が、各所で凝らされている。

助成金を支給され、新たな機器が導入されたラインでは、現在補助者もなく、岡田さん一人でパレット運び出し作業が行われている。ちょっとした工夫とアイデアで障害者の雇用が継続され、岡田さんの作業を行う顔も、いまでは明るい笑顔だ。



85日間培養されたビンのふたをとるため、ラインに乗せる岡田俊幸さん

大量の湿気の中で 作業は根気よく続く

続いて、きのこ育成室を訪ねた。育成室というだけあって、空気に湿気を大量に含んでおり、ここでの作業は大変そう。きのこの育成状況をみながら、知的障害者四人が作業に従事している。彼らは、培養室から育成室へ出てきた「やま

しめじ」の栽培ビンに、発育状況に合わせて一つひとつふたをしていく作業を根気強く行っている。

「やましめじ」の梱包・箱詰め作業（販売ライン）には、長瀬和子さんが従事していた。勤続年数は五年。梱包されてきた「やましめじ」を箱詰めするために、ダンボール箱を組んでいく作業を行っている。作業にも慣れ、多少の失敗はあるものの、順調に仕事をこなしているようだ。

ここでの作業を総括するのは、長谷部正樹さん。彼らが行う作業の一つひとつを注意深く見つめながら、同時に体調管理や日常生活の相談ごとまで気遣う毎日だ。長瀬さんも長谷部さんの顔を見かけると明るくなる。

全国各地の熱い想い 皆さんに届けたい

今回の「地方協会レポート」の取材を終えて思ったこと。それはやはり「障害者雇用は、一人ひとりの情熱、熱意」に尽きることだ。事業所の現場にまで足を運び、新しい職域開拓を模索する

ハローワークの所長、建設業とは全くの異業種でありながら「創造性」というキヤッチフレーズのもと、障害者雇用に取り組んでいく事業所の社風、それと「なんとか職場定着」の想いでカスタマイズ

された機器の導入へ踏み切った所長以下支援者の人たち……。

本誌「働く広場」も来年三月には創刊三〇周年を迎える。今回の取材を含め、全国各地の取材を通じて得たレポートの数々は貴重な財産だと思う。

全国各地で、障害者雇用に対する「熱い想い」を持ちながら活動する支援者の人たち、必死になって仕事に従事する障害者の人たちに、この「働く広場」の資産を送り届け、障害者雇用に対する理解を深めてもらおうと同時に、健常者も含めて、フリーター問題が叫ばれる現在、「働く喜び」をもう一度再確認する必要があるのではないかと思っている。

この「働く広場」の資産を、どうやって多くの方々へ送り届けたいのだろうか、かということを契機として制作したのが、「働く喜びをつかむ（平成一六年度）」、「輝くステージへ（平成一七年度）」というTVドキュメンタリー番組だった。番組の放映は終わったが、作品はDVD化をしているので、たくさんの方々に、ぜひともご覧になっていただきたいと思っている。

同時に、ル・クプルの藤田恵美さんにお願ひして、二作品とも番組主題歌作曲していただいた。「輝くステージへ」の主題歌「心の輝き」は、全国各地で「熱い想い」を持ちながら障害者雇用に関係・従事している皆さんに届いているのではないかと思っている。



出荷用のダンボールを組み立てる長瀬和子さん



培養室は霧がいっぱい。湿度と温度が管理された中で仕事をする伊藤勝也さん